

2009年11月1日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙7章1～12節

説教題：新しい御霊によって

はじめに

二千年前ローマの教会では律法を大切に考えているユダヤ人クリスチャンと、もうそんなものは関係ないと考えている外国人クリスチャンがいつしよに礼拝を守っておりました。次第に両者の考え方の違いは深刻になってまいりました。パウロはそのことを伝え聞き、問題解決のためにこの手紙を書いたと言われています。

そんな律法の問題は二千年前の人たちのことであって、もう私たちには関係がないように思われます。しかし実は、形を変えて、私たちにとっても切実な関わりがあるのではないかと思うのです。どんな関係があるのか。今朝はその所に焦点を当てていきます。

1 律法はよいものなのか、それとも悪いものなのか

(1) 律法はまだ有効だとする人たちへ「律法は無効となった」

意見が全く違う二つのグループに対してパウロは仲裁をしようとしています。どのようにして仲裁していくのでしょうか。どちらか一方にだけ肩入れするようなことはしません。両方の間できとんとバランスを取りながら、説明しようとしています。

まずパウロは律法を大切にしているたちの意見を採り上げ、それに対して間違っているところを指摘します。それは律法の有効期間という問題です。あなたがたは、いまでも律法は有効だと言っているようですが、果たしてそうなのですか。考えてごらんください。

あなたがたも知っているように、律法には結婚したら妻は他の男性といつしよに暮らすことはできないと定められています。ではもし、自分の夫が死んだらどうなのですか。夫が死んでもやっぱり他の男性と結婚できないのですか。そんなことはないですよ。だってあなたがたが大切にしている律法にも、夫が死んだら、他の男性と結婚しても全然問題ないと書いてあるのですよ。

ということは、律法にも有効期間というものがあるということになりませんか。律法が効力を失うときがある。それはいつか。結婚と言うことならば、夫が死んだとき妻は律法から解放されます。パウロは結婚という具体例を挙げまして、律法の有効期間について確認します。

そして次の段階に移ります。では律法は、現在も有効なのか、それとも無効になったのか。もう律法は無効になったのだとはっきりと言います。その理由は何か。4節にあります。「わたしの兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対して死んでいるのです。」

先ほど結婚の例を取りあげました。夫が生きている間は律法に従わなければならない。けれども夫が死んだら、妻は律法に従う必要がない。それと同じように、あなたがたはキリストのからだによって、もう死んだのだから、あなたがたは律法の支配下にはありません。律法は無効になりました。だから、クリスチャンは律法を守って、きちんと割礼を受けるべきだと言う必要はない。そんなふうに、

パウロはまず律法を大切に考えていたクリスチャンたちに説明をしました。

考えてみますとパウロが言っていることは、ただ一点を除けば常識的です。国が定めている一般の法律も確かにパウロの言うとおりになっております。人は死んだら法律に関しては一切の権利とか義務とかがなくなります。死んだ人に対して住民税を払いなさいということはありません。

問題は、ではいったい私たちはいつ死んだことになったのか。そこが疑問として残ります。そのことについてはまた後で触れます。

(2) 律法を軽んじている人たちへ「律法は聖である」

その前に、今度は律法はもう全く関係ないのだと考えているグループに対してパウロがどんな説明をしているのかを見ます。パウロは律法はもう無効になりましたと言いましたから、私たちはすぐに考えます。律法のことなんか、もう何も考える必要がない。あれは時代遅れの野蛮な習慣に過ぎなかった。

パウロは何と言っているのでしょうか。12節です。「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」

あなたがたは、もう律法なんか関係ないと軽んじていたかもしれないけれど、決してそういうことではない。律法は聖なるものなんだから、やっぱり私たちは律法を大切に考えるべきなのだ。

ここで私たちはとまどってしまいます。さっきは、律法はもうクリスチャンには関係がないかのように言った。でも今度は同じ口で、全く正反対のようなことを言う。パウロは矛盾したようなことを言っているように

聞こえます。もちろん矛盾でも何でも無い。

(3) 律法の役割

パウロは律法がどうして大切なものであるのか、こう説明しています。7節。「律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が「むさぼってはならない」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。」

私たちが生きていく上で、何が正しくて何が間違いなのかしっかりとした基準が必要だということはだれだって認めます。ではだれがその基準を定めるのか。人間が決めるのか。でもひとによって基準が違います。人間が決める限り、考え方の違いが出てきます。そうやって、今の世界は深刻な問題を抱えてしまいました。私たちには正しい基準を定める力がないということです。

だから神が律法という形で、善悪の判断を示してくださいました。その一つに「むさぼってはならない」というものがあります。これはモーセの十戒の十番目の戒めで、「あなたの隣人のものを、欲しがってはならない」と書かれている箇所を指しています。聖書はそれが大変な罪なのだ指摘します。でも人間が定めた基準の中には果たしてあったのでしょうか。ほとんどありません。むしろ、開き直ってきました。「あの人が持っているものを自分も欲しいと思って何が悪い。日本経済の発展のためにも、どんどん欲望をふくらませ、ものを買うべきだ。」その結果、どうなったかは皆さんがよくご存じです。今度は、地球環境をなんとかしなければと大騒ぎになっています。人間とは所詮この程度のものなのです。

律法が与えられたことで、何が正しく、何

が間違っているのか、私たちは初めて理解できるようになりました。パウロ自身もそうでした。ですから、律法には大切な役割がある。律法はよいものであると言うのです。

2 自分を責めてしまう私たち

(1) 「自分は価値がない」

さて、ローマ教会の事情があつてこの手紙が書かれたと言いました。ではいったい今の私たちに何の関わりがあるのか。今度はそのことを見てまいります。

おわかりのように律法は私たちの状態をさばくものです。パウロも言うように私たちに死をもたらすものです。しかし聖書の律法だけがさくのではない。私たちをさばこうとするものは、実にいろいろな形で存在するのではないか。例えばその一つ。「自分は本当に価値のある人間なのだろうか。」そういう考え方です。もちろん、中には逆のパターンもあつて「自分には大きな能力と価値がある。」そうやって自信満々になる方もいて、それはそれで問題です。しかし多くの場合は、「自分はこの世に存在する価値があるのか。もしかして自分は何の価値もない。生きていても邪魔者に過ぎない。」そういう不安をどこかで抱えているのではないかと思うのです。

(2) 心の中の律法に苦しむ

私はこれは心の中に住み続けているもう一つの律法ではないかと思うのです。その律法に多くの人たちが苦しんでいる。いや苦しんでいると言うことさえ気がついていない。この不安を押し返すために人はいろいろなことをやります。とにかく頑張つて能力を研いで他人よりも先に立たなければ。そうし

たら、この世の人たちは自分の存在価値を認めてくれるだろう。そんなふうにして、みんなあくせくがんばり続ける。しかしどんなに頑張つても、どこかにまだ不安が消えないで残つたままです。

3 あなたを責めるものは何もない

(1) 律法が無効になった瞬間

その不安は、神を信じてもお消えしません。あなたは神に愛されていますと耳では聞いているのですが、私たちの心の中に住みついている律法の声は、言い続けます。

「あなたは、ほかの人から愛されるような価値がない。ほかの人から愛してもらいたいのなら、もっと頑張らないと愛されない。」

私は自分自身のことを考えても、自分には価値がないと言うしかありません。確かにこのことばは正しい。否定できません。私が死んでも、すぐに忘れ去られる、だれも覚えてくれる人はいない。例えそんな人がいたとしても、その人もやがて死んでいなくなる。そう考えることもあります。もしここで何も解決がないのなら、仏教で言う「諸行無常」の世界です。これは人間の絶望です。

ところがパウロはこう言うのです。「あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえられた方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」

あなたがたはもう死んでいるのです。だからいつまで、心の底から脅迫してくる律法のことばにおびえているのですか。律法は何の力もなくなったのですよ。例え律法の声がささやきかけてきても、律法は何もすることができない。律法の声はこう言うかもしれない。

「あなたはだめな人間だ。あなたは価値がない。あなたは給料泥棒だ。もっと頑張らないとだれも誉めてくれない。」例えそんな声が聞こえてきたとしても、それがどうしたのです。確かに昔は私たちは価値のない人間でした。神の前には滅ぶしかない、ちりに等しい虫けらでした。しかし、神である方が、この私のために十字架で死んでくださり、死者の中からよみがえってくださった。価値のない弱いこの私は、キリストの十字架でいっしょに死んだのだと、神は言ってお下さっている。死んだ者に対しては律法は何の力もありません。だからもうおびえる必要がない。

例えて言えばこんな状態です。私たちはかつてライオンといっしょに檻の中に入れていたようなものです。ライオンがウオーとうなるたびに、私たちはもう殺されるとおびえていた。そうやっていつもびくびく不安に駆られながら生きていた。けれども今はどうなったか。確かに今もライオンは大きなうなり声を上げて私たちに飛びかかろうとする。ところが、そのライオンは檻の中に入れてられているのです。以前と大きく変わったのは、今私たちは檻の外に連れ出されているということです。自由にされていた。動物園に行くと、ライオンの檻の前で恐怖のために泣き出す人はいません。私たちが安全であることを知っているのからです。それと全く同じように、私たちは自由にされている。何もこわがることはない。

(2) 御霊は私たちに自由にしていく

パウロは言います。6節。「しかし、今は、私たちは自分を捉えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕え

ているのです。」

古い文字とは、私たちに脅迫する律法のことです。あなたはだめ人間だと囁く声です。しかし私たちはもう解放されています。檻の外に出ることができました。ただ解放されたのではない。もう一つのプレゼントをいただいた。御霊が与えられています。御霊は私たちのうちに住んでくださって、私たちに常に助けようとなさいます。その御霊のことについて、Ⅱコリント3章17節にこういうみことばがあります。「主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。」

私たちの心の底から脅迫する声が聞こえてきても、御霊がこんなふうに励まします。「恐れることはない。あなたのために神のひとり子が死なれたのではないですか。神が、あなたのことをどれほどに大切に考えておられるのか、思い出してください。神がいのちをお捨てになるほど、私たちは価値あるものと言われているのです。あなたはかつて何も実を結ぶことはできませんでした。でも今は、神のために実を結ぶことができるようになっていきます。それはすばらしいことではないですか。心配する必要はありません。実を結ぶために頑張る必要はありません。神がなさることですから。あなたをとおして、どんな実を結んでくださるのか、そのことを楽しんで歩んでみたらどうか。」

私たちが今、すべての律法から解放され、神のために実を結ぶために用いてくださるうとしている、神の恵みを覚えて御名を崇めます。